

Ⅲ 研究開発上の問題点

研究開発上の問題点

田中裕巳・斉藤真子

1. 実施の評価と研究開発上の問題点

本校は従来から中高一教育をうたいながら、カリキュラム上の工夫には特に見るべきものがなかった。中高一の教官組織であることによって、6年間の系統的な教科指導や生徒指導が、一人ひとりの子どもに即して実際になされてはいた。しかしながら、高等学校から新たに40名の子どもが入ってくるという中・高の学級数のアンバランスが、大胆な中高一貫カリキュラムの創造を長年にわたって阻んできた。

今回、併設型中・高等学校の指定を受けることによって、いわば外圧として、ユニークな中高一貫カリキュラムの創造を求められた。併設型のカリキュラムの構成原理として、1-2-2-1制が採用されたが、そこには本校の総合人間科の実践と、青年期教育の新たなとらえ方が反映している。

平成7年度から総合人間科は、中1と高3が、中高一貫教育の入口と出口として、「生き方を考える」という学年テーマを持っている。中2・中3と高1・高2は、「生命と環境」、「国際理解と平和」という学年テーマを繰り返す。この構造がすでに1-2-2-1制を先取りしていた。

また1-2-2-1制は、安彦忠彦教授（本校元校長）の所論であるが、中1を入門基礎期、中2・3を個性探求期、高1・2を専門基礎期、高3を個性伸張期として位置付ける。

この1-2-2-1制のカリキュラムの構成原理に立って、研究開発第1年次は、すでに実施に入ったものと、第2年次に向けて検討されたものとに分けられる。

○第1年次から実施されたもの

・中1、高1のソーシャル・ライフ 中1は、教育学部吉田研究室の援助、指導により、また高1は教育学部田畑研究室の指導により1年間にわたり実施された。中1は中高一貫の「入口」において、新しい人間関係の構築と人間関係における様々な問題とその対処のスキルを学んだ。高1は新しい入学者40名との融合が課題であるが、ソーシャ

ル・ライフ自体の時間は体育の時間として位置付けられている、10時間のみという問題点がある。

・総合人間科の実践 これはほぼ従来どおりである。

○第2年次の実施に向けて検討されたもの

・中学選択プロジェクト 中2・3で9教科10講座（英語のみ2）、無学年制によって実施することになった。2年間で4講座を選択し、「個性探求期」にあわせて、広く、浅く学ぶことがねらいである。

・基礎英語、基礎数学 中高一貫の中だるみ、学力差のつきやすい中2・3の時期に、英・数を隔週で1時間ずつ少人数（20人ずつ）で指導する。

・新教科群 「心と身体の科学」、「自然と科学」、「国際コミュニケーション学」、「共生と平和の科学」というクロスカリキュラム的な新教科群を、高1・2の無学年制によって履修させる。第2年次は、取り敢えず1年生のみ、「心と身体の科学」、「自然と科学」を実践する。

選択プロジェクトは、教科主導であるため、実践に向けての教科エゴ的な発言はまったくなかった。また高校新教科群の検討、担当者の決定にあたって、すべての教科が協力的であった。本校の場合、総合人間科の長年の実施が、総合的学習やクロスカリキュラムについての心構えをすでに作り上げていると考えられる。

問題点としては次のことを指摘することができる。

(1) 第1年次重点的に取り組まれたソーシャルライフもヒューマンプログラムの一部として位置付けられている。6年間のヒューマンプログラムの学年目標、ソーシャルライフ・学級活動・道徳・総合学習の学年テーマなどの関係が構造化される必要がある。

(2) 無学年制での指導については、特に高校では否定的な意見が多くだされた。新教科群を第3年次に無学年制で実施するかどうかはペンディングになったが、この検討をする必要がある。

(3) 新教科群は、4領域をクロスカリキュラム的に実施することが決まったが、1領域ずつにクラ

スを2～3の小グループに分けての実施では、クロスカリキュラム的な内容になるかどうか心配される。担当者の相互乗り入れや事前の十分な打ち合わせが必要となる。2年次の実践において大きな課題である。

- (4)「高大の連携」という点では、ソーシャルライフが研究者主導によって実践された。高校、特に高1のソーシャルライフのさらなる発展が課題であるが、選択プロ、新教科群でもいかに名古屋大学の研究者の協力（主にゲストティーチャーとして）を積極的に位置付けたい。
- (5)「キャリア形成」について数度の勉強会を持ったが、まだ共通理解にまでは至っていない。カリキュラム全体との関係、進路指導との関係などで、校務分掌、研究委員会の在り方なども見なおす必要がある。

2. 今後の研究開発の方向

(1) 併設型中高一貫カリキュラムの実践と評価

1-2-2-1制による中高一貫カリキュラムを貫く2つの柱が、総合的な学習「総合人間科」（中学1年生から高校3年生まで）とヒューマンプログラムである。

総合的な学習「総合人間科」は、名古屋大学の研究室の先生方がスクールボランティアとして登録し生徒一人ひとりの研究を支援するとともに総合人間科の学習に協力する体制がある。そのような学習の成果を「キャリア」形成の観点から研究することと評価することが今後の課題である。

ヒューマンプログラムは、教科の学習や総合的な学習「総合人間科」の基礎となるものである。中学1年生と2年生では、教育発達科学研究科の吉田教授をはじめ専門家による「ソーシャルライフ（人間関係構築スキル）」の授業である。心理学の知見をいかして体験的に取り組まれている新しい授業である。次にその内容をモデルにして担任と副担任がTTで実践することで、どのような成果と問題があるかを研究する。

さて、1-2-2-1制の中学2年生と3年生の部分には、少人数異年齢集団による選択教科「選択プロジェクト」がある。また1-2-2-1制の高校1年生と2年生の部分には4つの新教科がある。

（「自然と科学」「心と身体の科学」「国際コミュニケーション」「共生と身体の科学」）教科統合による新教科群である。「心と身体の科学」では、名古屋大学の総合保健体育科学センターの山本助教授の授業もある。教科内容・学習形態などが研究課題である。

1-2-2-1制による中高一貫カリキュラムの実践においては、インターネットや情報機器の活用とともに、多様な学習方法を試みることで指導方法の改善を図ることが不可欠である。中高一貫の系統的な情報教育の実践と研究も課題である。

(2)「青年期のキャリア形成」による進路指導の再構築

将来への豊かなセルフイメージを持つとともに、職業観を育成することは、青年期において重要である。進路指導を「キャリア形成」についての共通理解をふまえて見直す。同一キャンパスにある総合大学である名古屋大学の各学部との協力による「大学講座」（高2）やインターンシップなどの積極的な取り組みにより、普通科高校における進路指導のあり方を再構築する。

(3)「中高大の連携」をいかした「青年期のキャリア形成」の多面的展開

本校の施設設備が名古屋大学と同一キャンパス内にあるということで日常的に中学高校教育と大学教育の連携の様々なあり方を試み研究することができる。

教科の基礎基本に着目した、教育学部の大学院生による「個別学習アシスト教室」（中1・2）がある。

メンタルフレンドの「四つ葉相談室」（スクールカウンセラー）がある。

「中等教育センター」を中心とする「中・高・大の一貫教育」の研究も今後の研究課題である。

(4) 併設型中高一貫カリキュラムにおける条件整備

非常勤講師やゲストティーチャーなど多くの協力が必要となる。教室などの施設設備の拡充とともに、コーディネーターが重要となる。また校務分掌や持ち時間・内規などとの関連でも条件整備する必要がある。